昭和四十七年五月

佐土原中溝遺跡調査報告書

宮崎県道路公社

佐土原中溝遺跡調査報告書

石川恒太郎

一、発見の動機

この遺跡は宮崎市外佐土原町大字下那珂字中溝にあり、第1図に示すごとく国道一〇号線の「御殿下」バス停附近から東方に日豊本線を踏み切つた南方の丘地である。この丘地は標高九メートルの砂丘であつて、その東方は幅約五〇〇メートルの水田を隔てて海岸の松林のある砂丘に対している。そして、ここの海岸の砂丘の東側には石崎川の入江があり、その東に南から北に伸びた砂嘴がある。だから、遺跡のある砂丘は砂嘴を加えて第三砂丘に当り、ここより南方約一・八キロメートルの地点にある宮崎市の石神遺跡と同様の地質上の位置にあることが知られる。

宮崎県では、宮崎市内の交通緩和のため、ここにバイパスを設けることとなり、日豊本線の踏切の西方から国道一〇号線から分岐して南東に海岸へ走る一ツ葉有料道路を開さくすることとなり、そのため、この道路予定地の予備調査を行なつたとき、土器の破片の散布していることから遺跡の存在を推定していたが、いよいよ近く着工されることとなつたので事前に記録保存のため調査したもので、発掘調査に関する経費はすべて受益者である宮崎県道路公社が負担した。

二、調査の経過

第一日　曇後雨（女人夫七名）

昭和四十七年五月九日　午前九時現場に行き地表を調査するに弥生式土器の散布の多い所が二ケ所あつたので、西方の場所に南北に長さ一〇メートル、巾二メートルのトレンチを堀り、これを二メートル刻みに五区に分け北から*A*・*B*・*C*・*D*・*E*区とした。そしてこれを第1トレンチと名づけた。ここは地表から二〇センチメートルの深さに表土があり、土器の小破片がかなりあつたが、まとまつた土器はなかつた。しかし、*A*区にピットが三個あつたが、何の穴かわからない。ついで*A*区を東に四メートル延長してこれを*F*・*G*の二区とした。しかし、何らの遺構も見いだされなかつた。

それで、午後は第1トレンチを南に一〇メートル延長して*H*・*I*・*J*・*K*・*L*の五区としたが、*I*区に土拡らしいものが半ば現われた。そこで*I*区を東に二メートル延長して*M*区とした。すると土拡は完全な形を現わした。それで、この土拡は*I*区と*M*区に跨がつて存在したわけで、東西に長く、長さ一・五〇メートル、幅九五センチメールでほぼ楕円形で、底部は狭くなつており、地表からの深さ七〇センチであつた。午後四時半雨が降り出したので作業を止めて引き揚げた。

第二日　曇後晴（女人夫六名）

五月十日　雨に備えて合羽を着て午前九時現場に行つた。雨雲は次第に晴れたが、うすら寒く脱く必要はなかつた。第1トレンチの東方に、これとほぼ併行して長さ一〇メートル、幅二メートルの第2トレンチを設定し、これも第1トレンチと同様に、二メートル刻みに五区に分け、北から1・2・3・4・5区とした。こうして堀つた結果、第3区から縄文土器の破片、第4区からカメ棺の破片らしい土器片、第5区から弥生式中期の突帯文土器が出た程度で、何らの遺構をも発見することができなかつた。それで、午後は第2トレンチの第4区を東方に長さ五メートル、幅二メートル延長して、4区の隣二メートルを第6区、その東を第7区とした。さらにこの第7区を東方に長さ三メートル、幅二メートル延長したが、何らの遺構もなかつた。

この附近は、腐植土の層が地表下二五センチメートルから三〇センチメートル位であるので、包含層はほとんど耕耘機により破壊されているものと思われた。午後四時作業を終つた。

第三日　晴（女人夫六名）

五月十一日　第2トレンチの第5区を東に四メートル延長し、これを第一〇・一一区とし、さらにこれを東方に長さ五メートル、幅二メートル延長して第一二・一三区として堀つたが、何らの遺構もなかつた。それで、午後は第1トレンチの西方に南北一〇メートル、幅二メートルの第3トレンチを設け、北から二メートル刻みに、1・2・3・4・5区に分けて堀つたが何ものもなかつた。

しかるに、夕方になつて第3トレンチのすぐ東側に窪んだところがあり、そこから弥生式土器の底部が堀り出されたので、これを中心にして二メートル四方を堀ると、土器が続々と出てきたので、住居址ではないかと考えたが、日没近くなつたので雨に備えてテントをかぶせて引揚げた。

第四日　曇後雨（人夫五名）

五月十二日　昨日堀つた二メートル四方のところを南と北に各四メートルずつ延長して長さ一〇メートル、幅二メートルの第4トレンチとなし、これも北から二メートル刻みに1・2・3・4・5区として堀つたが土器はますます多くなり、一区では把手のある土器の破片が出土した。写真4はその状況を示す。また、3区のほぼ中央に写真3に見られるような深鉢形土器がほとんど完全に近く伏せて底部を失なつたまま発見された。しかし、土器は第4・5・6・7区に集中的に存在したので、その範囲を出すため、4・5・6・7区を東側と西側に各三メートル拡張した。そして、ほぼ全貌を出したとき雨が降り出したので作業を終つた。

第五日　雨後曇（人夫四名）

五月十三日　雨天であつたが、作業を行うこととした。雨は降つても砂地であるから大したことはない。遺跡の全形を出したとき雨が激しくなつたので、一時休み、十一時に昼食して午後雨が止んだので写真をとり、実測して作業を終つた。

三、発見した遺跡

この緊急調査で発見した遺跡は、土拡一と竪穴式住居址と見られる遺跡一であつた。

(一)　土　拡

土拡は第1トレンチの*l*区と*M*区に跨がつて存在した。東西に長い楕円形で長さ一メートル五〇センチメートル、幅九五センチメートルであるが、底部は上部より一〇センチメートル狭くなつており、深さ二四センチメートルであるが、現在の地表からの深さは七四センチメートルで、当時の地表からの深さは四五センチメートル内外であつたと

思われる。

土拡は弥生時代の墓制の一つであるが、最近では中に箱式の木棺があつたものといわれているが、この土拡には何らの遺物もなかつたので、その年代を確認することはできなかつたけれども、やはり包含層の年代から考えて弥生時代中期のものと見るべきであろう。第2図と写真2参照。

(二) 住居址

住居址と見られる遺跡は、前に述べたごとく第4トレンチの4・5・6・7区を中心に、東西四メートル、南北四メートルの範囲に土器が集中的に存在した。所在地が砂丘であるため竪穴住居址を確実に出すことは困難であるが、土器が集中的に存在している点、中央北寄りに灰の混つた黒い土が堆積していたこと、大形の壺形土器や深鉢形土器、それに割れていたが有孔の軽石が多かつたことなどから見て、住居址と見るべきであろう。

この土器のある範囲は、第3図に見るごとく中心から半径二メートルの円内に入り、方形にすれば東西四メートル、南北四メートルの範囲に入る。だから一辺を四メートルとする隅丸方形か、直径四メートルの円形かになるわけである。柱穴は見いだすことができなかつたが、床面は北方がやや深く、現在の地表下南方で五〇センチ、北方で六〇センチメートルであるが、当時の表からは四〇センチメートル内外であつたと思われる。

四、土器の特徴と年代

遺跡の年代を確定するものは出土遺物であるが、この遺跡では石器が有孔軽石破片数個を出しているだけであるから土器によらねばならないが、住居跡と見られる遺跡から出土した土器は、写真8に見られるような深鉢形のものが多く、これは口縁が斜めに上に開き、首部に一線または二線の縄目突帯をめぐらし、胴部は膨らまず首部から降るに従つて細まるもので、胴部にはほとんど文様はないか、中には刷毛目文を有する程度で底部に続くのである。甕形のものは、口縁がずつと外に開くものが多い。壺形の中に写真10に示したような特異な土器があつた。褐色の土器で表面は滑らかに磨かれており、口縁部を欠いているが、腹部が著じるしく張つているもので、首部から肩部にかけて同心円の突帯一〇条を一センチメートル内外の間隔でめぐらし、その下の腹部に二線を組み合わせた同心円の突帯を四〜五センチメートル間隔に五線めぐらしている。原形は高さ五〇センチメートル内外で、腹部は急速に縮まつて底につながるものであり、県下の弥生式土器中の特異なものというべきであるが、注目すべきは文様の同心円の突帯で、上に一線の突帯を一〇条めぐらし、その下に二線を組み合わせた突帯を五条めぐらしていることは、意識的に上下とも一〇条の突帯をめぐらしていることが知られる。

ここの土器の底部は、写真9に見られるごとく細長いものが多く、底は高台のあるもの、底が上げ底のもの、平底のものなどで、弥生時代中期の土器の特徴を示している。

これらの土器の特徴から見て、これらの土器を床面に有したこの遺跡は、弥生中期のものであることは疑う余地はない。

なお、住居址の北方、第4トレンチの北端附近で発掘した把手付土器も注目すべきもので、写真第4および第11に見られるごとく破片が不足していて復原は困難であるが、把手は長さ六・二センチメートル、径一・四センチメートルであるが、コップ形の土器である。コップ形土器は、昭和十七年の六野原古墳調査のとき、古墳外の弥生期遺跡から一個発見されたことがある。

以上に述べたごとく、発掘の土器の特徴から見て、弥生時代中期（西紀元年前後）の遺跡であるが、前にも触れたごとく、壺形の特殊

土器の文様が上に一線の同心円突帯を一〇線めぐらし、その下に二線を組み合わせた五条の突帯をめぐらしていることは、上下とも一〇条の突帯から成るもので、この時代の人がすでに数に対する理解をかなりの程度もつていたことを示しているのは興味深いものがある。

写真１．第１トレンチ

写真２．土坑のある状態

写真３．深鉢形土器の出土状態

写真４．把手附土器の出土状態

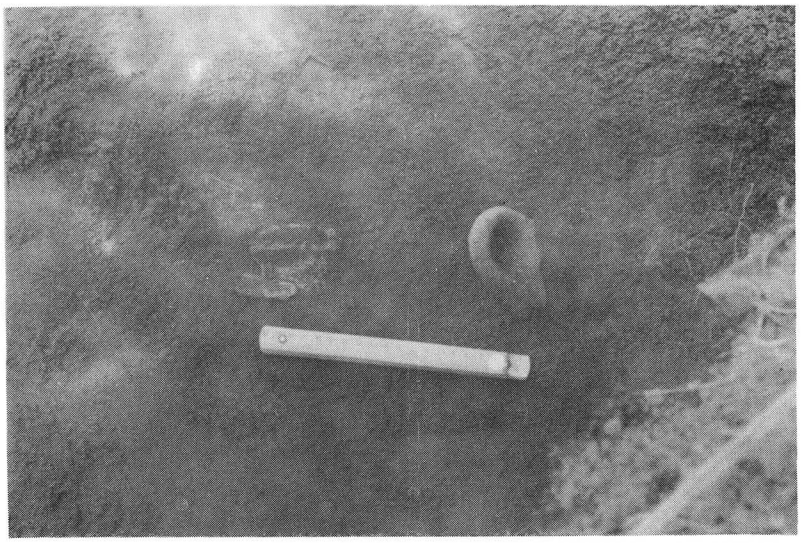


写真５．住居址東側の土器破片

写真６．同西側の土器破片

写真７．中央より北側の土器破片

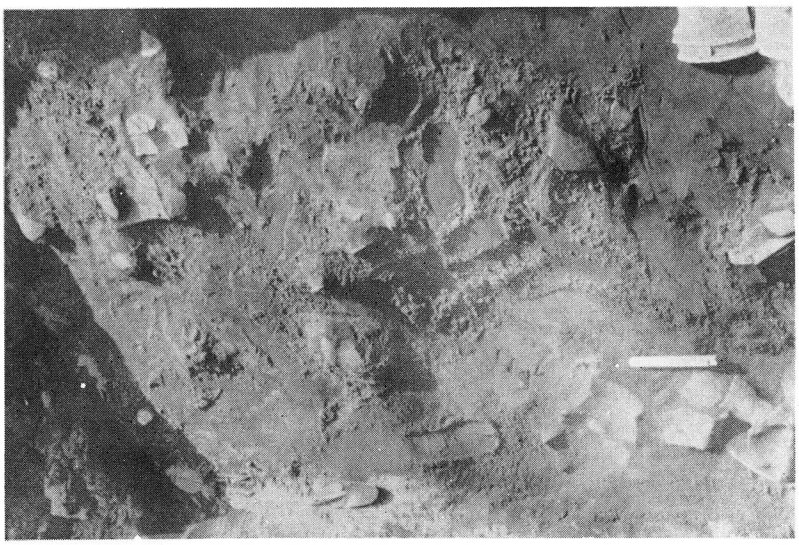
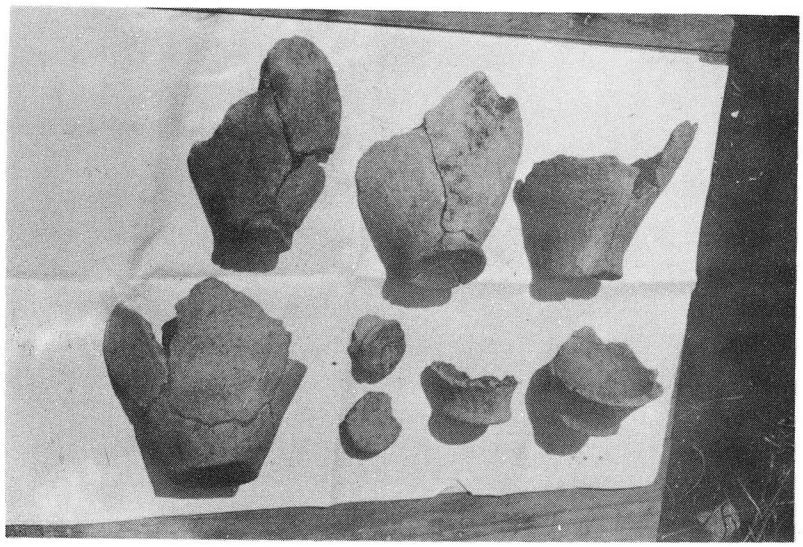


写真８．土器口縁と腹部

写真９．土器脚と底部



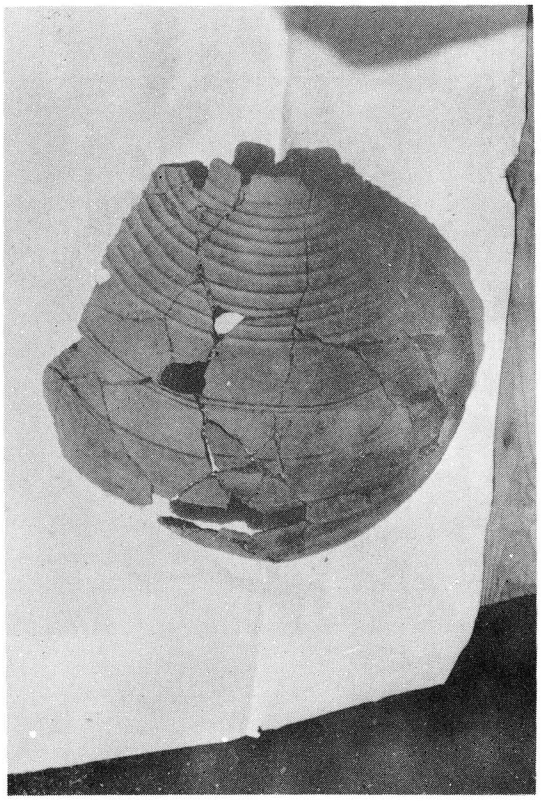
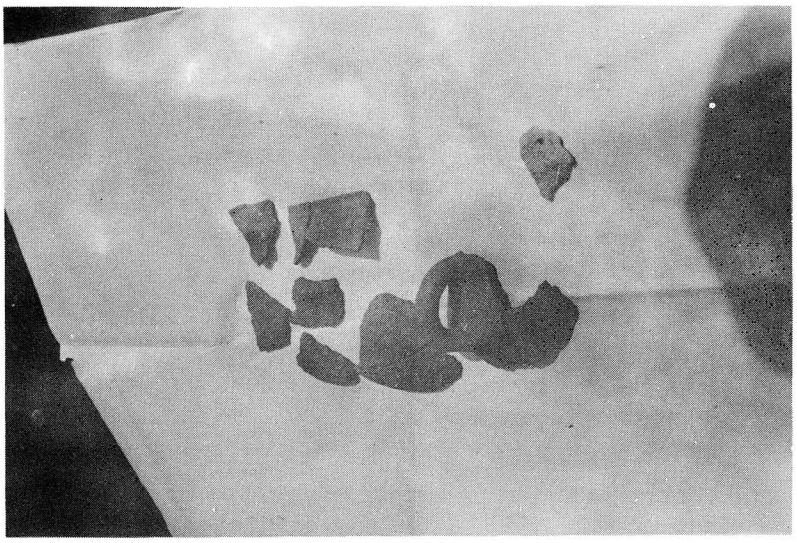


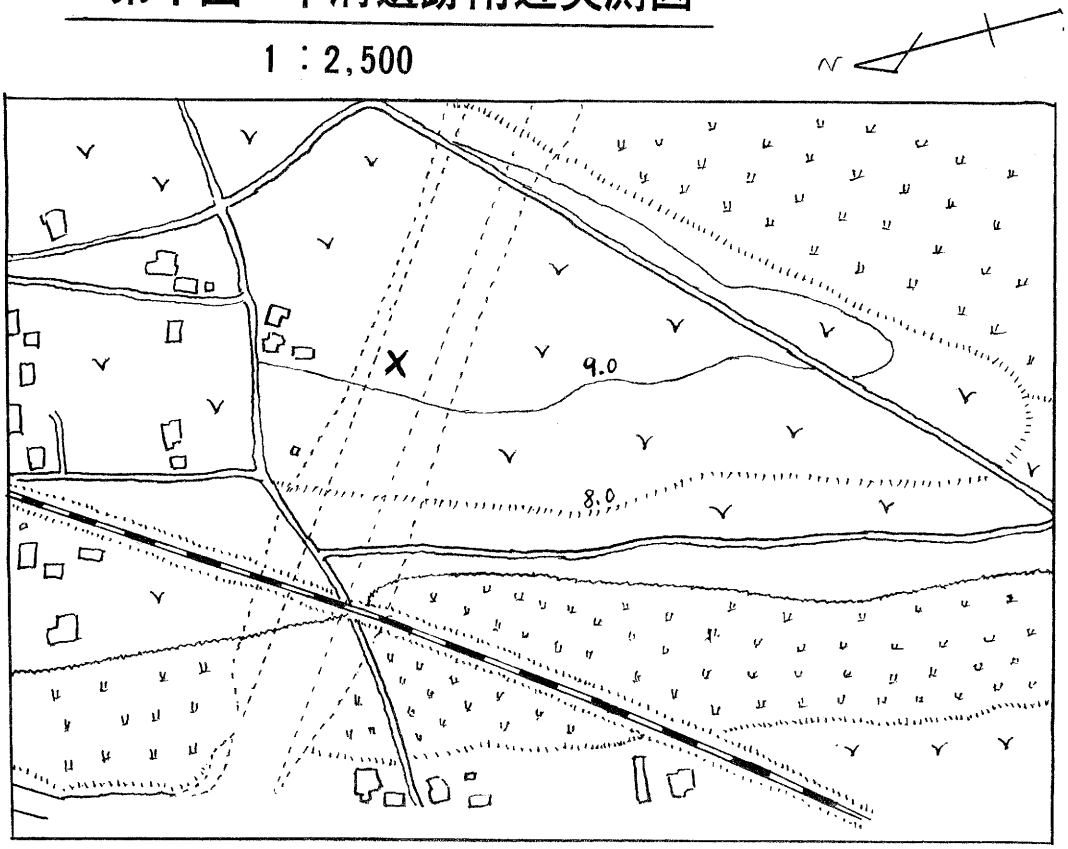
写真10 壺形特殊土器

写真11. 把手土器

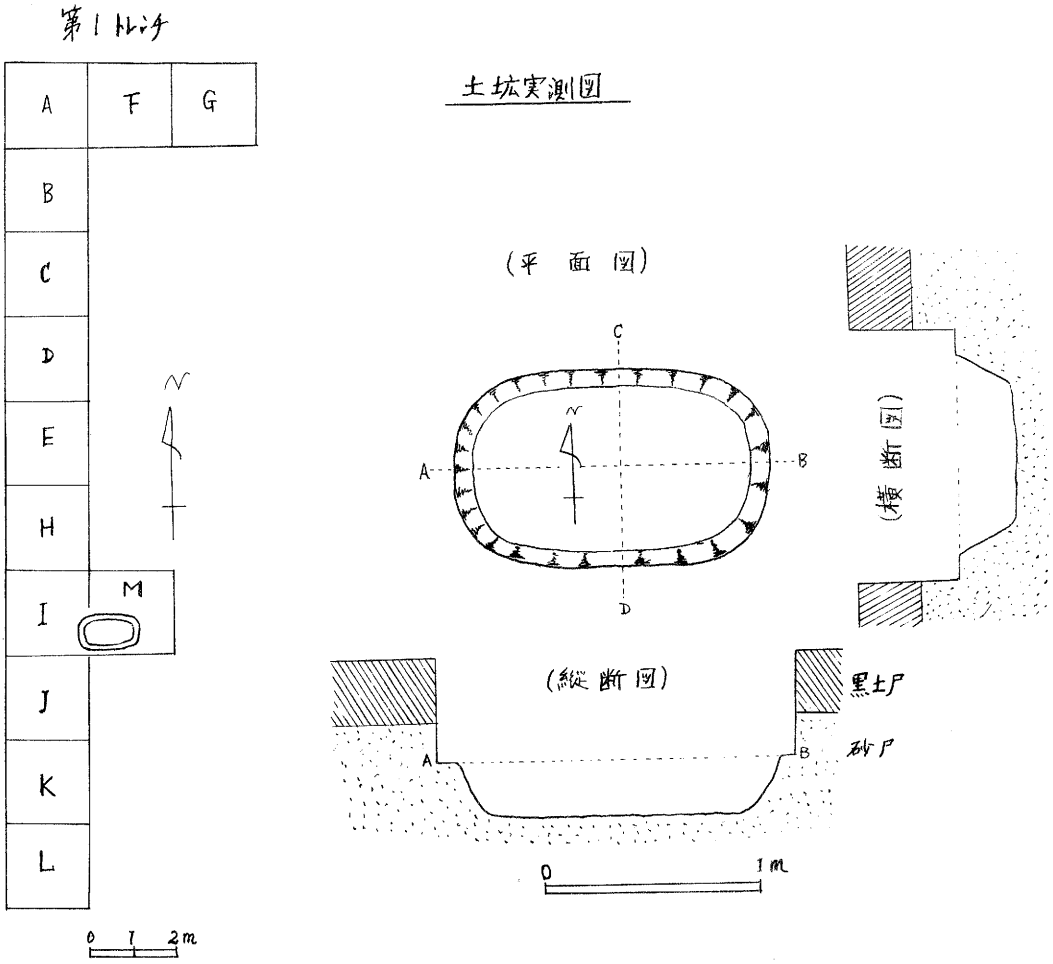


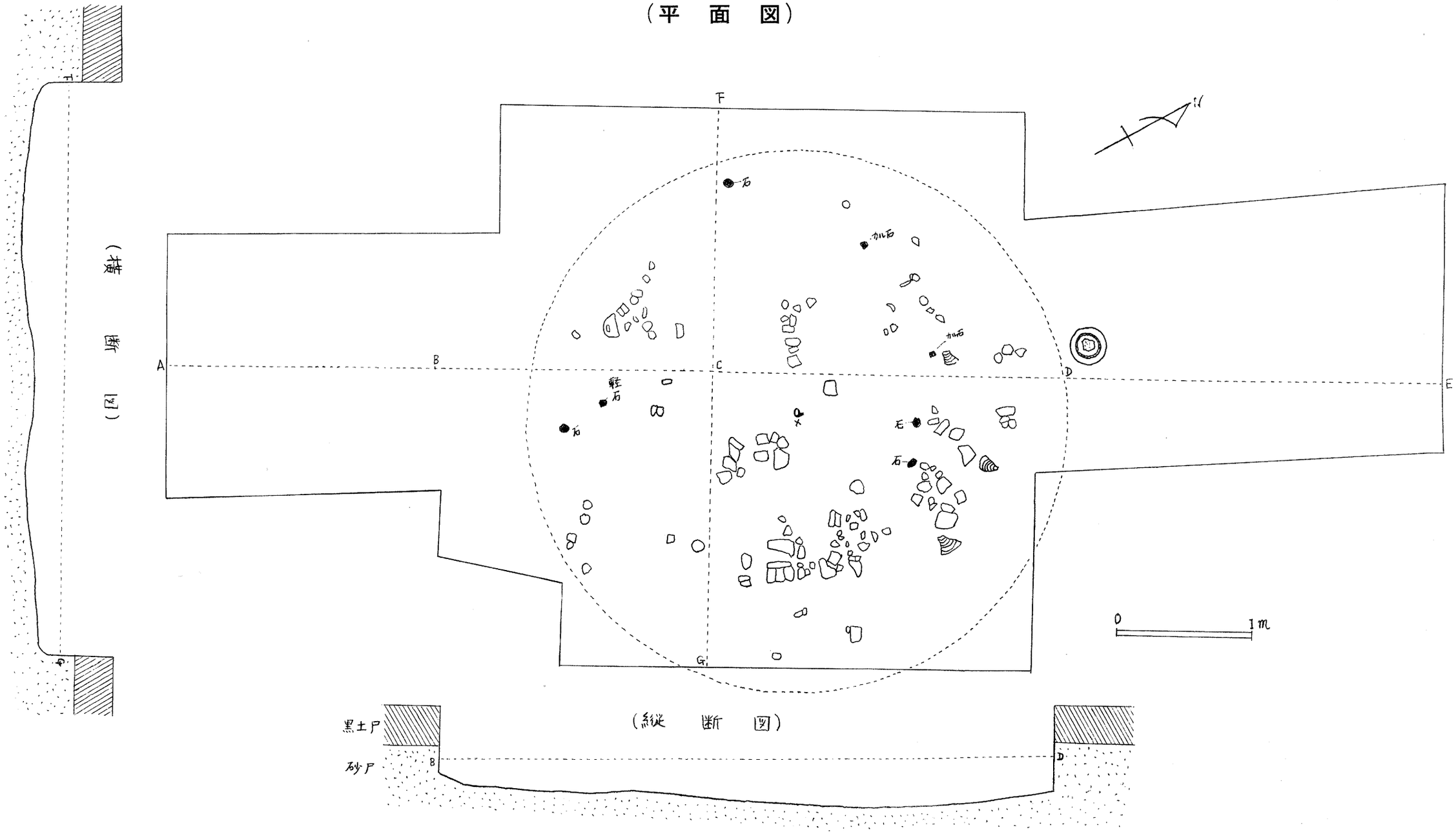
第1図　中溝遺跡附近実測図

1：2,500



第2図 第1トレンチと土坑実測図



第3図 佐土原町大字下那珂字中溝弥生期遺跡実測図

（平　面　図）